東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2007年3月9日

生まれ変わり-2-

親愛なるムスリムの皆様。覚えておられると思いますが、先週は生まれ変わりという思想について、その歴史やそれに関して述べられているいくつかの章句を紹介しました。今日も同じテーマを続けたいと思います。この思想が論理的に破綻していることを説明したいと思います。

まず、ユダヤ教やキリスト教においても、生まれ変わり思想は迷信だとされています。生まれ変わりを信じる人にとって、来世はありえないものになります。従って、信仰、特に来世への信仰と決して相容れないものなのです。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。生まれ変わりがもし真実であれば、魂の数が問題となってくるでしょう。この思想によるなら、魂はその存在のはじめから、一つの肉体から他の肉体へと移り変わりを続けるのです。魂の数が限られたものであり、例えばそれがX個であるとするなら、それはなぜX個であり、Y個やZ個ではないのでしょう。

この思想によるなら、一つの魂が何百もの、あるいは何千もの体を持つことになります。これはどこまで続くのでしょうか。一方で、人は今を生きるうえで、以前別の体で生きていた時のことというものを覚えていません。逆に人は、自分が自分以外の存在とは区別された人格を持つことを示す、自我を持っているのです。過去を覚えていないとすれば、生まれ変わりの思想は、人に何か実際的な効果をもたらすでしょうか。この思想は、因果関係という点でも人を満足させるものではなく、また人の責任を自覚させるものでもありません。

ご存知のように、多くの人々の遺伝に　おいて、親から子供へと伝わった、精神的、肉体的特徴があります。子供が母に似て器用だったり、父に似て冷酷だったりするのはなぜでしょうか。生まれ変わり思想では、この問いへ適切な答えを見出すことができません。

最も重要なポイントの一つが、世界の人口の増加です。この世界では次第に人口が増加しているのです。そしてこれからもどれほど増えるか、定かではありません。もし生まれ変わりというものが存在するのであれば、人口が一定であること、もしくは減少傾向である必要があります。しかし現実はその逆なのです。

一方、死によって他の肉体に移った魂が、自分にふさわしい肉体をいかに見出したのか、誰によって、もしくは何によってそれが決定されるのか、という点でも、明白な答えは出されていません。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。アッラーの英知と慈悲に対しても対立するものです。なぜなら最も完成された存在として人間を創造されたアッラーが、その魂をネズミやイヌやウシ、さらには虫などの肉体に宿らされることがありえるでしょうか。公正さ、英知、慈悲、慈愛、そしてその恵みが、これを許すでしょうか。

生まれ変わり思想は、預言者たちが遣わされたこと、啓典が下されたこととも相容れないものです。もし魂がこの世において自由で勝手気ままなものであるのなら、預言者や経典が下される必要はなかったでしょう。預言者たちが伝えた、アッラーの存在とその唯一性の次に重要な真実が、永遠の生、来世における生なのです。